

機関番号：31310

研究種目：研究活動支援スタートアップ

研究期間：2009～2010

課題番号：21800046

研究課題名（和文） アルコール依存症者の回復過程における自己意識・自己内省・不安の変化

研究課題名（英文） Changing in recovery process of self-consciousness, self-reflection and anxiety in alcoholics

研究代表者

若林 真衣子 (WAKABAYASHI MAIKO)

東北文化学園大学 医療福祉学部 保健福祉学科 助教

研究者番号：70550549

研究成果の概要（和文）：アルコール依存症は、現在治療法がなく、罹患してしまうと断酒を続けるしかない。アルコール依存症者には心理的な支援が必要であり、そのためには心理的なデータが必要である。そこで本研究ではアルコール依存症者の心理特性の基盤となる自己意識・自己内省・不安の変化について調べた。その結果、アルコール依存症者にこれらの因子の変化がある可能性は示唆された。しかしその詳細については今後も検討が必要である。

研究成果の概要（英文）：Alcoholics must give up drinking to live. This study focused on self-consciousness, self-reflection and anxiety in alcoholics which is a base of mental characteristics of alcoholics. This result indicates that there is some possibility of changing in recovery process of self-consciousness, self-reflection and anxiety in alcoholics.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	930,000	279,000	1,209,000
2010年度	720,000	216,000	936,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,650,000	495,000	2,145,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会科学 応用健康科学

キーワード：アルコール依存 依存症 心理

1. 研究開始当初の背景

アルコール依存症者（以下ア症者）の断酒率は、ア症専門医療機関退院後1年で30%前後となっている¹⁾。また、飲酒によって死亡したア症者の平均寿命は50～52歳²⁾³⁾であるとされている。以上の調査から、現状としては、ア症者の予後は良好とはいえないことが推察できるため、ア症者に対し現在一般に行われている治療及びリハビリテーションに

加えて、新たなサポートの可能性についても模索していく必要があると考えられる。

ア症者に対する治療法は、主として医学の領域で発展してきた。薬物療法、遺伝情報の解析等の研究が行われ、治療に応用されている。また、ア症者に対する心理的側面に関しても、集団療法や患者教育などの臨床研究に関する研究が行われているが、ア症の心理学的側面に関する基礎研究はほとんど行われ

ていない。アルコール依存症（以下ア症）リハビリテーションにおける新たな可能性を探る上でも、心理的な側面にかかわる基礎研究が必要であると考えた。

- 1) 樋口進（2007）アルコール依存症治療の現状と将来の展望. 精神神経学雑誌, 109(6), 534-535.
- 2) 野田哲朗・川田晃久・安東龍雄・大石和弘・平野健二・今道裕之・倉内道治・岩田泰男・日山興彦（1988）一衛星都市（大阪府高槻市）におけるアルコール症者の実態と長期予後. アルコール研究と薬物依存, 23(1), 26-52.
- 3) 徳永雅子・明石道子・紅露藍子・斎藤学（1989）アルコール依存症者死亡例の検討. アルコール医療研究, 6(4), 274-283.

2. 研究の目的

先行研究をみると、ア症者の心理特性における問題が、発症の前後から一貫して、広くは「自己意識」と「不安」にあると捉えることができる。本研究ではア症者における「自己意識」、「自己内省」、「不安」についての以下の仮説を設定した。

- ①ア症者の回復過程が進むにつれ、自己意識は公的・私的自己意識ともに低くなる
- ②ア症者の回復過程が進むにつれ、自己内省は高くなる
- ③ア症者の回復過程が進むにつれ、不安は低くなる

以上に示したように、本研究では、「自己意識」、「自己内省」、「不安」についてア症者を対象に調査を行い、仮説①～③を検証することを目的とする。最終的には、ア症者の心理特性及びその変化を明らかにし、ア症者への従来のリハビリテーションに必要な改善や、新しいリハビリテーションへの提言の基

盤となる知見を示すことを目指したい。

3. 研究の方法

研究目的にて述べた仮説を検証するためには、まずは回復の過程を示すための指標を設定する必要がある。本研究では、ア症者をまず「回復期前」と「回復期」に分け、さらに「回復期」群を断酒期間と SRRS の得点に応じて分類する。「回復期前」と「回復期」の区分に際しては、以下の点から行う。

①猪野ら⁴⁾は、自助グループ会員の追跡調査から、断酒期間2年未満を「不安定期」、2年以上3年未満を「移行期」、3年以上を「安定期」とした。本研究では、このうち「不安定期」と「移行期」を「回復期前」、「安定期」を「回復期」とする。

②東京都精神医学総合研究所が2007年に標準化した刺激薬物再使用リスク評価尺度(SRRS)⁵⁾における分類に基づき、さらに「回復期前」と「回復期」を詳細に区分する。

上記の区分に基づき、自己意識についての尺度⁶⁾、自己内省についての尺度⁷⁾、不安に関する尺度⁸⁾を使用し、ア症者の回復過程における心理特性を明らかにする。

また、ア症者における心理特性について、回復過程の変化をより具体的に検討するためには、縦断的な視点も必要であると考えられる。そのため、回復期のア症者を対象に面接調査を行い、回復過程の「自己意識」、「自己内省」、「不安」の変化を調査することにより、縦断的な視野を補うこととする。詳しい研究計画は下記の通りである

研究 1：刺激薬物再使用リスク評価尺度(SRRS)⁶⁾のアルコール依存症者への適用

研究 2：アルコール依存症者における自己意

識

研究 3 : アルコール依存症者における自己内省

研究 4 : アルコール依存症者における特性不安

研究 5 : アルコール依存症者の回復過程における自己意識・自己内省の縦断的調査

研究 1~研究 4 は調査研究であり、いずれも対象者は自助グループ会員を中心としたア症患者 200 名及びア症専門病院及びア症専門施設等ア症患者 200 名を予定している。これは自助グループ会員には長期断酒者が多く、ア症専門病院及びア症専門施設等には比較的断酒期間の短い者が多いからである。研究 1 では刺激薬物再使用リスク評価尺度 (SRRS)⁵⁾、2 では自意識尺度、3 では自己意識・自己内省尺度 (SCSR)、4 では状態・特性不安インベントリー (STAI) 日本語版を使用する。調査手続きは質問紙調査であるが、回収方法は依頼先の要望に応じる。

研究 5 では研究 1 で設定した回復期区分において、回復度がより高いと判断できる条件を満たしたア症患者 5~10 名程度を対象者とし、自己意識・自己内省・不安に関する質問を中心とした、1 時間程度の半構造化面接を行う。データを要素別にカード化し、自己意識に関わるもの、自己内省に関わるもの、不安に関わるものに、カテゴリ分類を行う。さらに、それらカテゴリ別に時系列に分類し、仮説①~③の検証を行う。

4) 猪野亜朗・大越崇・奥宮祐正 (1991) アルコール依存症の短期予後と長期予後一断酒会員の追跡調査から一。精神神経学雑誌, 93(5), 334-358.

5) Ogai, Y., Haraguchi, A., Kondo, A., Ishibashi, Y., Umeno, M., Kikumoto, H., Hori, T., Komiyama, T., Kato, R., Aso, K., Asukai, N., Senoo, E., and Ikeda, K. (2007) Development and validation of

Stimulant Relapse Risk Scale for drug abusers in Japan. Drug and Alcohol Dependence, 88, 174-181.

6) 菅原健介 (1984) 自意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み。心理学研究, 55(3), 184-188.

7) 辻平治郎 (2004) 自己意識と自己内省 : その心配と関係。甲南女子大学研究紀要, 40, 9-18.

8) 中里克治・水口公信 (1982). 新しい不安尺度 STAI 日本版の作成。心身医学, 22, 107-112.

4. 研究成果

文献研究を進めるにあたり、これらの調査当初予定していた尺度の利用について、特に自己心理学分野について見直しが必要である可能性もあると考えた。アルコール依存症 (以下ア症) の回復には自助グループが有効であることから、自助グループの機能という観点より、回復期ア症者の自己意識の変化について検討した。

その結果、ア症者の自助グループが持つ機能として、「自己洞察」や「自己の再発見」など私的自意識や自己内省に包含されるものが多く見出された。さらに、「対人関係能力の成長」や「スティグマへの対処」という、自己と周囲との関連するようなキーワードもあった。公的自意識の高まりが対人不安の前提である⁹⁾を考えると、こういった当事者を取り巻く環境を要因としてどのように考慮するかを検討する必要があるであろう。以上より、自助グループ内でのア症者の回復過程には自己意識への変化があるのは間違いないが、検討項目は他にも必要である可能性が示唆された。今後はこの課題を継続しつつ、研究計画 1~4 に新しい要素を加えた上で材料完成させることとした。

しかしさらに状況が変化し、例えば研究 1 について、SRRS を開発した東京都精神医学研究所が、アルコールに特化した尺度 ARRS¹⁰⁾ を開発したため、研究計画に変更が生じた。また、文献研究の結果、新たな検討項目としてポジティブ・イリュージョン、さらに臨床への活用を視野に入れ、対人関係スキル等を盛り込むことを検討中である。しかし対象者の負担を考慮し、質問項目を精査し、項目数を減らさなくてはならないため、今後も慎重に検討していく。

9) 菅原健介 (1988) 対人的不安研究におけ

る公的自意識の意義について. 人文学報, 196, 103-116.

10) Ogai Y, Yamashita M, Endo K, Haraguchi A, Ishibashi Y, Kurokawa T, Muratake T, Suga R, Hori T, Umeno M, Asukai N, Senoo E, Ikeda K (2009) Application of the relapse risk scale to alcohol-dependent individuals in Japan: comparison with stimulant abusers. Drug and Alcohol Dependence, 101, 20-26.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計1件)

高野裕治・高橋伸彰・木戸盛年・若林真衣子・小松賢亮・下斗米淳・井上孝代

ワークショップ「語りで支えあう」

若林担当：話題提供 (アルコール依存症者にとっての自助グループの機能)

日本心理学会 2009年8月28日於立命館大学

国内外の別：国内

6. 研究組織

(1) 研究代表者

若林真衣子 (WAKABAYASHI MAIKO)

東北文化学園大学医療福祉学部保健福祉学科 助教

研究者番号：70550549